

ダイナミックな構図と大胆な色使い、伸びやかで迷いのない筆致に引き寄せられる。山形市の山形美術館で開催している近藤亜樹さん（34）の絵画展「近藤亜樹一星、光る」。山形に移り住み、豊かな自然に触発されながら創作に励む話題の作家の魅力に迫る。

わたしたちは生きている

生まれ落ちたこの星で

カタチはみんな違うけど

光と影をいきている

たったひとつの美しい命

禱（いの）り、踊り、歌い、笑え

生きる命よ蘇（よみがえ）れ

今光るこの星に

本展の会場入り口に掲示されたこの言葉に、近藤さんの思いが凝縮されている。たくさんの命を奪った東日本大震災や愛する夫の死、出産などさまざまな出来事を通し、心に深く刻まれた命の尊さ。日常の光景や花、植物、母子などをテーマに「生きる」ことを表現し続けている。

近藤さんは昨年9月に山形に移住した。長年の夢だった家庭菜園ができる家に住み、トマトやナス、ツルムラサキなどを育てながらキャンバスに向かう。土に触れる時間が増え、雑草にも花が咲くことを知った。どこからともなく聞こえてくる鳥の声や風に揺れる葉、生き物が奏でる音に心を動かされた。

豊かな自然に囲まれた生活は、作品にも大きな影響を与えている。本展のタイトルにもなっている「星、光る」をはじめ「ネバーランド」や「ひかりのわ」など近作の背景は、色とりどりの小さな草花で埋め尽くされている。近藤さんは「これまでは花というと切り花だった。山形に来て、土から生えている花や草をよく見かける。生命力に感動した思いがあふれたのか、今回はものすごく雑草を描いている」と笑う。

本県の花・紅花を描いた「ただいま山形」（縦130.3センチ、横162センチ）も人気だ。札幌市出身の近藤さんは15年ほど前、東北芸術工科大に進学し、山形に住んでいた。この作品は、第二の古里である山形の自宅に飾っている紅花を見て帰ってきたことを実感し、そのうれしさを表現した。「紅花はおひさまのイメージ。とげとげし、すぐしおれてしまうところも引かれた」

「畑仕事をし、私たちも含め全ての命が小さな種から大きくなっていくと感じた。食べることは生きることという当たり前のことにも気付かされた。日々自然から学んでいる」と近藤さん。山形の地でどう進化していくのか楽しみだ。

「近藤亜樹一星、光る」は23日まで、山形市の山形美術館。入館料は一般1200円、高校・学生800円、小中学生400円。



山形に帰ってきたうれしさを表現した「ただいま山形」(c)Aki Kon do courtesy of Sh ugoArts)



近藤亜樹さん